荒木山通信

2018年4月
第2号
荒木山の古墳を顕彰する会

北房の古代が熱い！

大谷・定古墳群の国史跡指定を記念して、平成二十（二〇〇八）年十二月十四日、定の古墳調査を担当した岡山大学大学院の新納泉教授が講演された。

新納教授は、調査を通してこれらの古墳が西日本トップクラスの価値を有し、七世紀の日本の歴史を考える上で、さらに評価が高まるだろうと話し、「副葬品も非常に特徴的だ。朝鮮半島や高句麗の農具、畿内産の土師器など。また、蘇我氏が高句麗から輸入したものを基に作ったとみられる双龍環頭大刀などもある。」この様な極めて特異な古墳がなぜ北房の地に集中して築かれたかについて、「畿内から出雲へ抜ける道が通り、備中への入り口にあたる。七世紀の北房は交通の要衝だったと考えられる。」と述べている。

また、少し想像を交えて話すとして「日本書紀によれば、五六二年、大伴氏が百済を支援するため出兵し、戦勝記念に高句麗から宝と共に女性を連れ帰り、女性は蘇我氏へ嫁いだという。もしかすると、その一人が北房へ来ているのではないか。金糸などは、半島系のランクの高い人物の物で、副葬品と一致する。」と述べている。北房の古代は、実に熱い！

祝

今年、平成三十年（二〇一八年）は、
大谷発掘三十周年
大谷・定古墳群
国史跡指定十周年

北房歴史講演会「大谷一号墳とその時代」

大谷一号墳は、三段の方形墳丘部と二段の方形檀からなる当時としては大型で立派な古墳であり、副葬品も金銅製の双龍環頭大刀や鏟（さん）と呼ばれる斧状の金銅製品など極めて珍しいものです。

築かれたのは七世紀後半で、終末期古墳と呼ばれる時期のものです。終末期古墳とは、前方後円（方）墳を築くのをやめ、表面を平滑に整えた切石を用いた横穴式石室（定北古墳・大谷一号墳）や、墳丘を何段かの石列（外護列石）で飾るものも出現します。北房の定古墳群と大谷一号墳もそれです。

また、七世紀になると古墳の築造場所を風水の思想によって定めることが行われるようになります。背後に山があり、前方に川（水）、その向こうに平野、平野の向こうにまた山と言ったもので、定古墳群や大谷一号墳も風水による築造と考えられます。

終末期古墳の時代は、概（おおむ）ね飛鳥時代と重なりますが、仏教伝来、蘇我氏の台頭と滅亡、朝鮮半島の危機、古代史最大の内乱と言われる壬申の乱、中央集権国家に向けての律令制定など、激動の時代でありました。

当時の北房を考えてみますと、吉備中枢（総社平野一帯）の後背地に当たり、また出雲へも近く、畿内政権にとって、吉備と出雲を掌握するのに戦略的適地であったと考えられます。このことは、吉備における終末期古墳の分布が定古墳群に集中しており、北房の地が他の地には見られない畿内政権との強い結びつきを示しています。

さて、仏教は次第に精神的な影響を強め、七世紀の終わり頃には、地方の有力者も古墳の築造をやめ、寺院を建立するようになりました。

この寺院建築と終末期古墳は共通点があります。それは、寺院の塔などの基壇を築くのに、石を垂直に積み、段の平面を版築工法（性質の異なる土を交互に叩き締める工法）で造っており、古墳の外護列石も同様なものです。

この時代、大化の薄葬令（六四六）や仏教が終末期古墳に与えた影響は大きいと言えます。

※四月十二日（木）の講演会の総社市埋蔵文化財学習の館館長平井典子先生のお話からその一部を紹介しました。

今年度前期の活動

時の流れは速く、はや四月も終わろうとしています。

一月二十五日の総会で、平成三十年度の活動計画が承認され、二月十七日の役員会で年度前期の実施計画が決まり、会員三十七名で活動を始めています。

三月　三日（土）
一三：三〇～一六：〇〇
柴掻き・掃除作業
（会員一四名）

三月十七日（土）
一三：三〇～一六：〇〇
立木の伐採・片付け
（会員一一名）

〔立木の伐採や片付け〕3月30日

三月三十日（金）
一三：三〇～一六：〇〇
立木の伐採・片付け
（会員他一三名）

四月十二日（木）
一三：三〇～一五：〇〇
北房歴史講演会
《会場：北房文化センター》
演題　**「大谷一号墳と　その時代」**
講師　総社市埋蔵文化財学習の館　館長
平井典子　先生
（参加者　五四名）

四月下旬
機関誌「荒木山　通信」第二号発行

なお、五月から真庭市の公民館講座が始まり、荒木山の古墳測量調査などの活動に本会も協力することにしています。

また、八月には公民館講座で視察研修も予定されています。

大谷一号墳に表札を！
― 吉備大宰　石川王墓 ―

荒木山の古墳を顕彰する会
代表　久松　秀雄

昭和六十三年（一九八八）年の大谷一号墳発掘調査（第一次）から、今年で三十年を迎えた。北房町では、当時町史の編纂中で、その原始古代の執筆者であった平井勝氏は、大谷一号墳が切石積の石室であり、墳丘の列石が段をなしていることなどから、七世紀において県内に類例のない古墳であると語り、「この古墳を調査しないと、北房の古代は書けない。」と話した。

この時の調査は、石室及び墳丘の規模、構造の概要を求めるものであったが、調査の結果は極めて貴重な成果をもたらし、北房の古代史を飾ることとなった。

中でも、被葬者については、大きな関心が寄せられた。平井氏は、調査報告書で被葬者について六ページにわたり記述し、吉備大宰が葬られた可能性に言及した。また、平成七（一九九五）年には「終末期古墳と大谷一号墳 ―被葬者は吉備大宰か―」と題するシンポジュームが開催され、平井氏のほか、近藤義郎・猪熊兼勝・門脇禎二といった、著名な研究者がそれぞれの持論を展開した。その中では、「壬申将軍の一人であった吉備大宰石川王の死に際し、畿内政権が贈ったのが大谷一号墳であろう。」

【シンポジュームの案内チラシ】

との見解が出されるなど、被葬者は六七九（天武天皇八）年に吉備で病死したと日本書記が記す吉備大宰石川王が最有力であるとの見解が共有された。

そこで、この古墳が地方の一有力者の墓ではなく、吉備大宰石川王の墓であるとの表札を掲げることを提唱したい。

ここで改めて、その根拠とされる事柄を概略列挙してみる。

①古墳が単独で築かれ、追葬がなされていないこと。

正面五段の方丘を版築をもって築いていることなどから、在地の首長ではなく一代限りの高位・高官と考えられる。

②極めて丁寧に加工された切石積石室は、奈良県の岩屋山古墳の十分の七の相似形であること。

また、唐尺を用いている可能性が高いことなどから、設計図や技術者が畿内から贈られたとも考えられる。

③古墳から約三百メートル東、谷の入り口あたりに大宰の地名（元禄検地帳）があり、古墳との関係が想定される。

④日本書紀が記す吉備大宰と古墳築造時期がほぼ合致する。

⑤定古墳群は、川を隔てた東側の山に連続して五基築かれており、大谷一号墳と同系列とは考えづらい。

⑥七世紀後半に古墳を築造できたのは、天皇や皇族、及び権力執行機関を担う高位・高官など、一部の有力者に限られており、地方では中央から派遣された大宰が相当する。

⑦金銅装の環頭大刀、大宰の権威を示す儀仗かも知れない金銅製品など、高位の人物にかかわる副葬品が出土した。

【大谷一号墳出土の鏃形金銅製品】

或る少年の回想

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問　戸村　彰孝

桜が満開の昭和十六年四月八日、一人の少年がこの年から国民学校と名を変えた水田国民学校に入学した。校門を入ると右手に楠公の騎馬像と奉安殿があった。

この年、十二月八日大東亜戦争が始まり、真珠湾攻撃の戦果に沸き立った。校庭では勇ましい太鼓で満蒙開拓団が送られた。

二年生の春、その少年は上水田校に転校し、新しい友達をつくった。四百人の全校生は「一億一心」の掛け声の下に銃後の守りについていた。

荒木山に沿った陰地道を郡神社に参り戦勝を祈願し農繁期には出征兵士の家を訪ねて田植えや稲刈りの勤労奉仕に汗を流した。

毎日の登校時は校門五十米手前から歩調をとり、校庭に立てられているルーズベルト、チャーチル、蒋介石の藁人形を竹槍で突き刺してから教室に入った。

日本の歴史や修身では、神武天皇の東征、ヤマタノヲロチ退治、木口小平のラッパ、養老の滝、乃木大将の水師営会見、「杉野は何処、杉野は居ずや」と歌う悲痛な広瀬中佐の歌、そんな記憶が甦る。工作では、飛行機も作った。

戦局が好転しなくなった十九年になっても神風が吹くことを信じて疑わなかった。しかし、二十年八月十五日、「忍び難きを忍び…」という天皇陛下の玉音放送を聴いて、少年たちの心は動転した。信じられないことが起こったのである。

教室では、昨日まで使っていた教科書が軍国主義だとして墨で真っ黒に塗りつぶされていった。民主主義の時代になった。

少年が二十二年に卒業すると同時に、国民学校は再び小学校に変わり、エレメンタリースクールと英文の表札が掲げられた。

少年が戦時中と戦後の一年を過ごした学校は今閉校となり、新しく北房小学校の統合校が生まれた。喜ぶべきか、悲しむべきか。

今や往時の少年は八十歳を越え、千七百年昔の荒木山東古墳の目覚めを待ち乍ら、自ら歩んできた道を懐しく振り返るのである。

※水師営の会見：一九〇五年、日露戦争中の旅順攻防戦の停戦条約が締結される。日本側は乃木大将、ロシア側はステッセル中将。

【昭和21年度の卒業写真】

玄関に英文表記の表札が

地域の皆さんに感謝！

本会は、平成二十八年二月発足以来、度々現地に立ち入り、古墳の景観整備のため、伐木、柴掻きなどを行ってきました。

活動については、地権者をはじめ地域の皆さんに深いご理解と温かいご協力を戴いておりますことに、心より感謝申し上げます。

次に、関係地権者のお名前を掲げ、感謝の意を表します。

大柳幸恵様・宮本慎介様
城﨑　進様・増田豊子様
工藤敬二様・大柳　満様
森脇寿美恵（故増田豊）様
城﨑　顕外一名様

解明に期待！　荒木山の古墳
十一月から調査開始

かねてから市に要望していました、荒木山の東塚、西塚古墳の測量が十一月から始まることとなりました。

本年度は東塚を、来年度に西塚を行うこととなります。東塚は、三世紀末から四世紀初頭に築造された前方後方墳で、備中地方では数少ない形式の古墳です。

一方西塚は、四世紀に築造された前方後円墳です。

古代、この地域で何故このように連続して古墳が築造され、どのような人物が埋葬されたのか、古代ミステリーの解明に少しでも近づくことを期待しています。

調査に当たっては、真庭市政策アドバイザーの同志社大学文化情報学部の津村宏臣准教授を中心としたグループと地元住民、真庭市の三者で行われます。

調査方法は、地中探査機やドローンなどのハイテク機器を駆使して、古墳の測量はもとより、埋葬施設や葺石などの地中構造物の状況を調査することができ、荒木山古墳の解明に大きく近づくことが期待されます。

測量に参加を！

調査期間は約一週間の予定ですが、この間多くの手伝いが必要となります。興味のある方はどなたでも参加できます。多くの参加をお待ちしております。

北房振興局、または顕彰会事務局までご連絡下さい。

【東塚古墳】前方部から後方部を望む。

荒木山を訪ねて（その二）

グリーンタウンの在る北コースからでも、常井池西側の空き地へ駐車しての南コースからでも十分も上れば、東塚と西塚の中程へ着きます。

今回は、前方後方墳の東塚をご案内します。

墳丘の大きさは、全長が四十五メートルで、その内我々が上っていく、低くて細長い「前方部」が二十五メートル。幅はくびれ部で八メートル、先端で約十六メートルです。

平面形が三味線のバチに似ていることから「バチ型」と呼ばれ、古墳時代初期の形とされています。

一段高い長方形の「後方部」は、長さが二十メートル、幅が十五メートルあります。

墳丘の高さは、前方部の先端で、二、三メートル、後方部先端で約三メートルで、前方部と後方部の段差は一・五メートルです。この段差が大きいことが初期の特徴とされています。東塚は、後方部が後に削られており、本来は現在より段差は大きかったと考えられ、これも初期構造を示す要件です。

【南コースの山道】

さて、埋葬施設が埋まる「後方部」の頂上平坦部は、長さが十四メートル、幅十一メートルで、墳丘の大きさからして異常に広く、後に削られたと考えられること、また周囲に段や溝状のものが巡っていることなどから、中世の山城として使われたと考えられています。

次号では、東塚と山城の関係についてご案内します。

【常井池西側の駐車場】

《入会のすすめ》

趣旨に賛同し、入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。そして、入会時に年会費三千円を納入下さい。

会員へは、当会の活動状況や計画をお知らせするほか、真庭市が開催する歴史関係の講演会などもご案内します。